

---

# イルルヤンカシュ神話

無限のシン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イルルヤンカシユ神話

### 【Nコード】

N0986V

### 【作者名】

無限のシン

### 【あらすじ】

神暦3544年、龍族の王クリソフィラクスに一人の男の子が生まれた。

名はケルレルレと云った。後のイルルヤンカシユの幼名である。

古来より彼らは戦いの一族と恐れられていたが、強力な王が誕生していない時に一族は部族間あるいは部族内で内戦状態に陥ることがあった。

それほど好戦性において彼らは突出していた。一説によると戦っていないければ死んでしまふとまでの伝承があるが、その真偽は定か

ではない。当時の王クリソフィラクスは一部族に匹敵するほどの力を持ち50年抗争を経て、部族をまとめあげた。そんな平和な時代に生まれたケルレルレは3度、命の危機にさらされた。王権争いである。兄弟姉妹は他に6人いて、皆彼より年上だったからだ。兄弟喧嘩を王権争いとみるのは妥当ではないかもしれないが、過去多くの龍族の王子、竜子（りゆうし、と呼ぶ）は兄弟喧嘩の末に命を落とすものも少なくないのだ。ただし、龍族の王族の命をとると恐ろしい呪いをうけるとされているため周りのものが止めるのである。特に若い時に命を奪うほど呪いは強いとされる。さらに、王権の争い相手は兄弟姉妹のみではない。時の龍王クリソフィラクスもまた強力な争い相手となる。過去2世代クリソフィラクスはわが子たちと戦い勝利している。

ケルレルレは12歳の時に故郷を離れることになる。いわゆる成龍化するために必然的にそうせざるえないのだ。成人した龍族の王族同士はお互いに相容れないのがその理由だ。

先に故郷を離れていたのは長男ミドガルド、長女ムシュフシユ、三男ガンダルヴァであった。協力が敵対か？それぞれがそれぞれの思いを持って 故郷に、そして外の世界に潜んでいる。王位継承戦争の勃発までどれほどの味方をそしてどれほどの力を得られるのだろうか。

## 序章 龍と神

「何故我らに敵対する龍の王よ」

神々は倒れ銀の鎖に体を縮めるように縛りつけられている人のようなものを見て問うた。龍の王は名をリユーンと云った。緑色の髪の毛をした小さな細身の女であった。彼女はわずかに顔をあげると意志の強そうな瞳でざらりと神々を睨み言った。

「何故獅子がガゼルを食らうかという質問をあなたは獅子に向かってするのか？神々よ」

神々からはため息がもれた。また、この問答かということだろう。一体何百年、いや何千年、二つの勢力は闘い続けているのだろう。血気盛んな神の一人が叫ぶ。

「やはり、龍と神は相入れぬものだ。滅ぼしてしましましょう」

「そうだ。それがいい。神々に永遠の安寧をもたらすのです」  
口々に賛同する神々たち。その目は怪しい光に包まれている。

「さて、皆のもの」

一段高い豪華な装飾のほどこされた椅子の上に座った輝く光に包まれた神が口をはさむ。

「たしかに、我々は永遠の命を持ち、決して死なぬ。それを脅かすのが唯一龍族であることは事実だ。しかし。同時に我々は龍族を手く扱うことができるならば、神々の頂きにのぼりつめることができるだろう」

「古来龍族を飼おうとした者たちはいくらでもいます。しかし、叶いませんでした。皆今では滅んでいきます。どうか同じ過ちは繰り返さぬようお願いします」

だが、野心溢れる神々の長は説得されなかった。なぜなら。長にはもうひとつの懸念があったからだ。

「ここで龍族を殺すと一族は呪いをもらう。人間でいうところの伝染病のごときものだ」

その時、龍王は再び顔を上げると、神々を笑った。

「龍族の呪いは意志を持つ、もし、私を殺せば、永劫呪いの力の消えるまでお前たちを呪ってやる」

神々の長の不愉快そうな声が聞こえてくる。

「お前の死はどのみち決定事項なのだ。リユーンよ。神々の力甘くみたな。150年近く続いた治世も終わりだ」

神々の一人に付き添われて青年が一人現れる。男の姿を見ると、強気だったリユーンの眼はわずかに揺らいだ。口からは小さな声が漏れる。

「ヴァーミテラックスか。シユメール神族に身を売ったか」

青年は冷徹な目をしていたが、リユーンに駆け寄ると、鎖を少し緩めてやった。

「母上。あえて今は母上と呼ばせていただきます龍王リユーン」

リユーンは悲しそうに息子を見た。

「いいだろう。これも龍族にまつわる宿命なのだろう。だが、ひとつ忠告しておくぞヴァーミテラックス。神々は決して龍族とは相入れぬ。それは一部の神々がわかっているところでもあるがな」

「忠告しかと承りました。母上。安心してお逝きください」

ヴァーミテラックスは冷静に腕を振り上げると手刀をリユーンの首にうちおろした。こうして、神暦3003年龍王リユーンの治世が終わった。

## 一章旅立ち(1)

風が西から行く手を阻むように吹きつけてくる。流れに一步一步逆らいながらイルルは歩いた。進むたびに大地は生命を失い、空は暗くなつていくようだった。だが、後を振り返ることはできない。きた道は一方通行なのだ。もし、戻れば、命はないと何度も警告を受けた。イルルはまだ生まれて16年を経過したばかりの少年だ。だが、もう帰る場所はない。掟は絶対だった。昨日の夜、成人の証がイルルの体に刻まれたのだ。その青い斑点はいつやってくるとも知れないものだったが、ついにやってきたのだ。そして、育ての親、アルトルミル・ベルストは彼に告げた。

「その斑点が消えるまでお前は不死に限りなく近い存在だ。だが、消えた途端、争いは始まる。消えるのはどの子供も同じ時期なのか、違うのかさえわからない。ただ、一ついえることは決して故郷には帰ってはならない。帰った時、お前の命はない」

イルルは自分が不死だと実感したことはない。今も変わらず心臓は鼓動を打ち、息は肺を通って循環を繰り返す。何も変わらなかつた。少しの違いも成人の刻印の現れる前と後では違わないはずだった。しかし、周りの人間は変わった。急に冷たくなり、よそよそしくなったのだ。

アルトルミルは彼に家庭教師を雇って勉強を教えた。特に龍族の歴史については熱心だった。一日の時間の大半を歴史の授業に費やす日もあった。だからイルルは周りの態度の変化も納得していた。故郷を離れるのは辛かった。外の世界のことを空想していたが、どんなものかはわからない不安もあった。食料はあと一日分。故郷を離れる時にもらった地図を見ると一番近くの町に着くまでに半日程の距離だった。

少年は黙々と目的地目指して歩いた。とりあえず、その町で働いて、お金をもらおう。そして、遠く、遠く、どこまでも遠く離れた

土地まで行く。

## 一章旅立ち(2)

『ホルンへようこそ』と書かれた看板が立っている。多くの家が坂道に沿ってなだらかに並んでいる。土造りの質素な家だったが、町には活気が溢れていた。通りでは子供たちがはしゃぎ、主婦たちは近くの木陰で子供に目を配りながらお喋りをしていた。イルルが側を過ぎると、すぐによそ者だと彼女たちは気づいて声をかけた。「坊や。どこからきたんだい？」

イルルの服装は黒の胸元のゆつたりとした龍族の旅衣装だった。アルトルミルが成人のお祝いとしてくれたものだ。暑い中一層暑い服装だったが、他に服を持っているわけではなかった。

「東から来ました。ドランディアというところですよ」

一瞬、女たちは、その名前を聞いて、びくつと表情をこわばらせたがすぐに冗談だと思っただけらしい。笑い声を上げて

「やだよ。まったく。冗談が過ぎるんだから。伝説の民の住む都ドランディアの話は昔、お伽話で聞いたけどね。そこに行くには、途中に恐ろしい獣の住む深い森があった。行ったものは誰も帰ってこない『帰らずの森』らしいよ」

といった。僕はその森を抜けて来ました、と言うのが正しい行いだっただかもしれない。だが、イルルは彼女たちの反応から、思わず口からは違った言葉が出た。

「すみません。どこから来たかは言いたくないのです。どこか、仕事と食べ物を与えてくれるところを知りませんか？」

家事の途中だった主婦は顔を見合わせて、「悪いわね。知らないよ」と口々に言いながら自分の家に帰っていく。イルルは諦めてさらに町の奥深くに入っていくために歩き出した。あたりは夕闇が迫り、もう暗くなっていくようだった。家を一軒一軒回ることにはしなくなかったが、他に方法もないので、あたってみることにした。体はこれまでの野宿やら空腹やらで弱りかけていた。食料の干し肉は



少し残っていたが、これはいよいよという時のために取っておかなければならなかった。ホルンの町の人々は用心深く、イルルの姿を見た後、変わった服装をまじまじと見てすまないが他をあたってくれと、手を振って戸を閉めた。

何度も断られ、時間は深夜にかかろうとしていた。今日も野宿か、と半ば思いながら、町外れにポツンと立つ一軒の家が目に入った。駄目だろうと思いつつ、少年は戸を軽く叩いた。すると、間をおいて、中から一人の老人が出てきた。

### 一章旅立ち(3)

「何のようじゃ。若いの」

しわがれた声が夜に響く。イルルは疲れきった声で何度も口にだした台詞を繰り返す。

「今日一日の宿と食べていくための仕事が欲しいのですが」

「ホルンの町は森に囲まれた町じゃ。仕事なぞ狩りか木を切るぐらいしかないぞ。若い身でつらい仕事じゃぞ」

「なんでもします。どうかお願いします」

「いいだろう。はいりなさい」

家の中には近くで狩った獣たちのはくせいが所狭しとかけられている。

イルルは感謝の気持ちはあつたが、動物たちの魂の去つた肉体の器をじつとみつめて、老人が怖くなった。黙っていると、老人は食事をもつてきてくれた。目は温かかった。食事も温かい、ベーコンとパンだった。少年は初めて食べる物珍しい食べ物に戸惑いながらも口に含んでみると、うまい。空腹だったこともあり、出されたものはあつという間になくなった。老人は笑っていた。

「よく食べるのお。よっぽど腹が減ってたんだらうて明日は早くに家を出るぞ。しっかり休みなさい」

毛布を渡されたイルルは横になるとすぐに眠気はやってきた。

翌朝、起きると、同じようにパンとベーコンが置かれていた。老人はもう外に出る支度を済ませているらしく、茶色のかかとまで隠れるワンピースを着ていた。

「食べたら出発するよ。そういえば名前はなんていうんだい？若いなの？」

口にパンをつめこんでいた少年は飲み込んでからゆっくりと名前を告げた。「イルルヤンカシュ」と。略して皆イルルと呼ぶこともつけ加えた。

「イルルだね。今日は遠くまで行くよ。私の名前はエンヤというよ。エンヤ婆さんとも呼んでおくれ」

「はい。エンヤ婆さん。ついていきます」

「どこに行くか聞かないのかい？変わった子だね」

老婆は柔らかな表情をした。

「エンヤ婆さんは僕を助けてくれました。力にならせてください」

真剣な少年の目を見たエンヤは過去の思い出を振り払って、一人外に出た。イルルを待つ間そっと呟く。

「可哀想に。これからどうなるかも知らずに。でも、これは死んだ夫との約束だからね」

老婆の目には諦めに似た感情が溢れていた。

少年が旅支度を終えて外に出ると、老婆は促し二人は歩き出した。

## 一章旅たち(4)

西に向かう道をすっかりとした足取りで歩きながら、数時間行くと、深い森が見えてきた。暑い陽射しを遮る木々は道の両側に不規則に並び、一度道を外れると抜け出せないぞといわんばかりに、生い茂っていた。他に道を行き来する人はいなかった。朝早いということもあったのだろう。さらに歩くと、だんだんと日も昇ってきた。だが相変わらず、すれ違う人影はなかった。イルルは少し不安になった。エンヤ婆さんはどこにいったかというのだろう。やがて暗くなってきた。これ以上は進めないというころ、森の先に灯りが見えてきた。

「エンヤ婆さん。灯りだよ」

イルルは嬉しそうにはしゃいだ。

ほとんど無表情のまま喋らなかつたエンヤも少し微笑んだ。

「そうだね。イルル。さあ、もう少しだよ。あそこが、光の町ラン  
ドブルムさ」

二人は町に着くと、きれいに整えられたレンガ造りの道を疲れた足取りで進んだ。地面を踏みしめるたびにエンヤの足腰は震えた。この老婆の年では過ぎた運動だったらしい。

「エンヤ婆さん。大丈夫？」

イルルは気遣ったが、もう少しだから大丈夫だよとエンヤは答え、早く目的地に着こうと、力を振り絞るのであった。

「さあ。ここだよ」

エンヤが指差す先には古い洋館がずっしりと建っていた。苔が玄関にびっしりと生えて一日中、日の当たらない様子が見て取れる。

「ここで、仕事と食料がもらえるんだね」

「そうだよ。イルル。さあ中に入ろう」

二人は中に入ると、筋肉のもりあがった男が二人立っていた。二人はエンヤを上から見下ろした。

「やあ。エンヤさん。久しぶりだね。また旅の子供かい？いいね。子供は高く売れるよ」

「ああ。これで、残りの金額分たりるだろう？」

今度はもう一人の男が口を出す。

「それは売ってみてからでないとわからないね。とにかく今日は泊まっただけだよ」

「借金がこれで返せると思ったのに、一体、いつまで返し続けなければいいんだい」

老婆はいらいらしていた。男は彼女の怒りに鈍感らしく、軽蔑の笑いをみせた。

イルルには何の話かわからなかったので訊ねてみた。

「エンヤ婆さん。この人たちは何の話をしているの？」

「イルルや。お前の働き先はこの人たちが決めてくれるよ。安心しなさい。さあ、今日はもうお休み」

「寝床はこつちだよ。坊ちゃん」

男が一人、用心深く玄関への道をふせぎながら、もう一人が優しくイルルを案内する。

「ありがとう。おじさん」

イルルは晩をゆつくり過ごして寝ると、翌朝、エンヤはもう発っていた。お礼もいえずに別れてしまったのに悲しみながら、2・3日何の心配もなく暮らしていた。だが、ある日、男たちの様子がいつもと違った。怖い顔で、イルルを町の広場に連れていったのだ。

## 一章旅たち(5)

「おじさん。どこに行くの？」

聞くイルルの手を引つ張り握り締めると、男たちは無言で進んでいった。

「痛いよ。おじさん」

悲痛なイルルの声は、広場にこだまする。広場には木で組み上げられたステージが出来上がっていた。正装をした細身の男が少年を紹介する」

「さあ、何の病気もない。何の健康に問題もない。元気な男だよ。召使として使うもよし、肉体労働に使うもよし。おっと、その貴婦人、さあ、よくみてくださいよ。さあ、100ゴツドルからだよ。競った競った！！」

ここにきてようやく、イルルは自分のおかれた立場を理解した。僕は人買いに売られてしまったんだ。エンヤ婆さん。何故こんなことを。うっすらと目に涙が浮かぶ。信じていた親切なお婆さんに裏切られたのだ。しかも身体が思うように動かない。重くなってきた。イルルを広場まで連れてきて、がっちりと肩を掴んでいるたくましい男が残酷な声で告げる。

「ようやく気づいたかい、坊や。だが、もう遅いよ。しかし、薬が効くまで3日もかかるなんて、変わった子だ。たいていその日のうちに聞いて、動けなくなるんだがね」

観衆はイルルに好奇の視線を向けるだけで助けようとするそぶりすらなかった。

違う。僕はただの旅人だ。売られるようなことは何もしていない。イルルの思いはしかし、言葉には出なかった。手足のしびれもひどくなくなってきた。少年は着ている服を剥ぎ取られ、生まれたままの姿になった。恥ずかしさで顔が真っ赤になった。

その間も競りは続いていく。200ゴツドル。250ゴツドル。

400ゴツトル。掛け声は続く。イルルの予想以上に逞しい四肢を見て、値段が跳ね上がった。

そこへ、一人の中年の紳士が声を出す。「1000ゴツドル」あたりが静まりかえった。誰も競るものはいない。この瞬間、イルルの運命は決まったのだ。周囲の観客がざわめく。

「ほら。あの人。静養に来た王族って噂の。用心棒の目つき見たかい？ありやあ、かなりの修羅場をくぐっているね」

中年の紳士の護衛らしき人物がお金とイルルを交換しにくる。鋭い目をしていたが、目の奥は温かそうだった。

「私はライゼンという。おぬし名前は？」

かろうじて、言葉を出せた。だが、相手には聞き取れなかったようだった。イルルを今まで支えていた男が、イルルといいます旦那、と愛想よく答えた。

「なるほどイルルか。では、行くか。歩けそうにない少年を見て、肩にかつくと、颯爽と群集の中を歩き出した。

イルルはぐったりと、馬車に乗せられて、いつの間にか眠ってしまった。

目を開けたとき、きれいな装飾がほどこされた部屋にいた。そこには一人の子供が座っていた。

「目が覚めたようね。今日からあなたの主人になるイストリシア・フェルゼンニーノよ。良く励みなさい」

わずかに胸がふくらんでいる。どうやら少女のようだった。イルルは寝ぼけたまま、少女の放つ威厳に思わず

「はい」と答えていた。

## 一章旅たち(6)

それからイルルとイストリシアの生活が始まった。イストリシアはごく親しい間柄の人間からはイリアとよばれているらしかった。二人はどこに行くにも一緒だった。厳しいしつけや、覚えることの多さに最初は苦勞したイルルだったが、少しずつイリアの奴隷として馴染んでいった。ある時イリアはイルルに言った。

「お前はどこから来たんだい？イルル？きつと途方もない遠くから来たんだろうね。私もいつか、そんな遠くの世界を見たい。叶わぬ夢だけれどもね」

彼は本当のことを言うのをまたしてもためらったが、しばらく一緒に暮らしていて気を許していたのもあったのだろうか、

「ドランディアというところから来ましたイストリシア様」

と短く告げた。ためらいの気持ちからかドランディアの発音はひどく不明瞭だった。ドランディア？とイリアが聞き返す。少年の奴隷は今度ははっきりと言った。

するとイリアはホルンの町の主婦たちのように目を丸くして、驚いた表情をした。

「お父様と同盟を結んでいる東の国の王の故郷がそんな名前だったかしら。記憶があやふやだわ。今度お父様に聞いてみましょう」

イルルは東の国の王族であった自分の境遇を思い出して、悲しくなった。だが、今は奴隷である自分が王族だと言っても笑われるだけだと思ったので、黙っていた。

それから一年が過ぎた、イルルはやや、身長が伸び、立派なイストリシアの護衛として、武術に励む日々だった。師匠はライゼンという、かつてイリアの父の護衛だった人物が引き受けた。そう、彼を肩にかついだあの男だった。久しぶりにあつたとき、男は片目を失っていた。なんでも、戦いで失ったらしい。少年を見るなり、こう声をかけた。



「おう。イルルか。久しぶりだな。立派に励んでいるようだ。今日から武術をお前に教えるライゼンだ」

こうして、イリアと離れて暮らす日々が続いた。修行は苛烈を極めたが、イルルは驚くほどの適性をみせた。

半年後にはライゼンは弟子のイルルを自慢してまわるほどになっていた。

「この少年は筋がいい。もはや、私の教えることはない。いずれ、フェルゼンニーノ王家を支える屋台骨となるだろう」

ある意味ではこの予言めいた発言はあたっていた。しかし、別の意味では、まったくあたっていないことになる。だが、ライゼンはそんなことをまったく考えて発言したわけではなかった。長く続いた王家の繁栄を信じて疑わぬ男の姿があった。

ある時、大きな事件が起こった。その日イルルはいつものように武術の訓練に励んでいた。”カササギの構え”から、”カジキの突き”に入る型の練習をしていたのだ。すると、ライゼンが真っ青な顔で駆け込んできた。

「ルカッタ様が戦死された。同盟国の裏切りにあつたらしい」

イリアの父が死んだのだ。イルルは同盟国がどこかということまで気が回らずに、ただイリアの泣くさまを思つて、悲しくなった。葬儀があつたのは夜だった。ライゼンの弟子として彼も参加した。遠くから見るイストリシアは気丈にも喪服を着て、平静を保っていた。遠くからイリアを眺めていた。ふと目があったような気がした。

## 一章旅たち（7）

次の日からイストリシアは王の行っていた執務を引き継ぐことになった。この国では王の身边を警護する役目を王室直衛隊が担っていた。実質的な国の指導者となったイリアは彼らに守られることとなった。そして、イルルも彼らと寝食を共にすることとなった。師のライゼンはイルルの出世を喜んだ。

「あの子供が王室の限られた特権貴族で構成される直衛隊に入ることになるのは、なんとも感慨深いものよ。この恩に報いるためにしっかりと勤めを果たすのだぞ」

「はい。ライゼン様から受け継いだ技で必ずイストリシア様を守ってみせます」

ライゼンは元気よく答えるイルルの先の苦労を思いやって、気持ちが沈んだ。ライゼンもかつて、王の護衛だったのだ。しかし、同僚や直衛隊士の妬みは凄まじかった。片目を失ったのも、思い返せば人々の負の心情から起こったことだったのだ。

案の定イルルは他の隊士からまるで親の仇のような視線で見られた。素性のわからぬ奴隷を、国の中心である古くから王と縁故の深い直衛隊に入れるという屈辱を若い子弟の誰もが見過ごすことができなかつた。ちょうど年輩の隊士が王と共に死に、若い子供が後を継いだのも、いじめに拍車をかけた。チームワークで行わなければならぬ護衛という任務に、これでは支障がでないはずはなかつた。イルルは隊の一員として機能していなかつた。ただ、彼にとつてイリアのそばにまた仕えられるのは何よりの幸福だった。今もイリアは彼の主人であつた。

しばらくして、また事件が起こつた。国の王政を転覆しようという反王民と呼ばれる組織の一員がイリアを襲つたのだ。剣を抜いて隊士たちは応戦するが、イリアの乗っている頑丈な馬車に向かつてきた一人の男。手には古代の貴重な武器『銃』を持っていた。万事

休すかに思われた。イルルはいつものように馬車の遠くを警護する役目を命令されていた。異変に気づいたときすでに事は終わっていた。

襲撃者は燃えていた。皆、イストリシアの力に怯えていた。これが古代から脈々と受け継がれる、王家の持つ力、アツァエル神力であった。

晩、誰もイストリシアに近づきたがらなかった。イルルが身辺警護を任さることになった。部屋の外のドアでじっと、注意をこらして立っている仕事だった。イリアは部屋の中から彼に話かけた。「イルルか。ようやく、ゆっくり話ができるな」

「イストリシア様。もつたいないお言葉です」

「お前がかつて言っていた故郷。ドランディアといったな。そこで父は命を落とした。そして、弟は囚われの身となった。本当は護衛などいらぬのだ。ただ、彼らにも仕事を与えてやらねばなるまい。

父は決して人前で神力を見せなかつた。私は何故だろうと思っていたが、今は理解している。護衛の役目はイルルお前がいればそれでいい。これからは、お前を護衛の第一人者”血の男”に任命しようと思つ」

「お言葉ですが、イストリシア様。私を取り立ててくださるせいであなた様の身辺に迷惑が降りかからねばよいのですが」

「これは私の意志だ。お前は初めて会ったときから信頼できると思つていた。そして、役に立つ男だと。強くなれイルル。他の誰よりも一人で私を守るほどに」

二人の会話はそこで途切れた。イリアはドアを隔てていつの間にか寝入ってしまったようだった。イルルは決して、彼女を死なせはしないと誓った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0986v/>

---

イルルヤンカシュ神話

2011年7月29日03時20分発行